

トマス・アクィナス著
SUMMA CONTRA GENTILES の現代的解釈 (8)
第50章～第57章

ボナツィ・アンドレア
(Bonazzi Andrea)

北 川 朋 子

予備知識 (第44章からのつながり)

ヨブ記 28:24 神は地の果てまで見渡し／天の下、すべてのものを見ておられる。

Iヨハネ 3:19 - 20 わたしたちは自分が真理に属していることを知り、神の御前で安心できます、心に責められることがあろうとも。神は、わたしたちの心よりも大きく、すべてをご存じだからです。

子供はお母さんがコーヒーを飲むときに使っている使い捨てのコップを見て、経験によって獲得された「コップ」という普遍的概念をそれに当てはめて、コップとして知性認識することができる。けれども、「発泡スチロール」(Styrofoam™)を知っている化学者、またはあらゆる物質の基本構造を知っている物理学者たちが、その同じコップを見た場合、子供よりもっと普遍的な概念によってより深い認識を持つことができる。

ところが、学者たちはお母さんが使っているコップを見た場合は、より普遍的な認識を持つからといって、その固有な認識(子供のような認識)を持ってないことにはならない。人体の一般的な法則を知っている医者は目の前にいるこの患者の固有の身体をも知ることができる。

キーワード：トマス・アクィナス、対異教徒大全、キリスト教思想史、哲学、神学

同じように神の認識は普遍的でありながら、個別的な認識を持ってないことはない。

Stump E., Kretzman N. (1995), 'God's Knowledge and its Causal Efficacy', in: T. D. Senor (ed), *The Rationality of Belief and the Plurality of Faith*, Ithaca NY, 94-124.

「神における知性認識」についてのトマスの細かい理論は、前もって論じた「類似論」(本巻第29章～第36章)の適用の一例である。神について肯定的に述語できることは「類似」を通じてでなければならない(本巻第34章参照)。類似でもって有限的な被造物について述語されることがら(「知性認識」もその一例である)は神に当てはめられるわけであるが、その際二つの条件を満たさなければならない。1) その単語(概念)の普通の使い方には神に適合できない側面を除外しなければならない(via remotionis 除外の道、または否定神学)。2) 除外を行った後残った部分は、神に当てはめる際、人間経験を超越の意味の拡張(その拡張はどこまで行くかは完全に規定できない)を行わなければならない(via eminentiae 卓越の道)。

Kretzman (op. cit), 169以下参照。

人間は物事を認知する際は、感覚的データの外に、感覚的データを抽象的データに変える「可知的形象」が必要である。これは神経生物学の研究からも確認されている。Oliver Sacksは大衆向きの書物の中で、次のようなケースを紹介している。事故に由来した認知障害をもった患者は、手袋を見せられて、「何ですか」と聞かれ、「突き出る五つの小袋を持った布」と答えた。さらに推測するように促されて、「コイン入れ」という判断を示した。(The Man Who Mistook his Wife for a Hat, New York, Summit Books, 1985. 『妻を帽子とまちがえた男』, 晶文社, 1992)。このケースは、視覚的データと触覚的データは正しくても、そのデータを普遍的概念(トマスの言う「可知的形象」)と結びつける能力の失敗を示している。

人間の知性認識と神の知性認識の相違は、トマスにとってまさにここにある。つまり、神について語る場合、神には感覚的データや「形象」を想定すべきではないというわけである。「神における認識とは、万物を独自の仕方ですらに有する」(Innenhaben) ことであり、我々が行う認識とは、或るひとつのものを『自らのうちへ入れる』(Innewerden) ことである。(E. Stein, *Des hl. Thomas v. Aquino Untersuchungen über die Wahrheit*, 1931, I, 30-33. J・エスタライヒャー著、稲垣良典訳、『崩れゆく壁』, 春秋社, 1969年, 348頁参照)。

神における認識のあり方の研究を通して、対照的に人間における認識のあり方を深めることになると期待されたい。

第一卷

第50章 神は万物について固有の認識を持っていること

418

さて、神は他の諸事物について普遍的な認識しか持っていない、つまり神が自己自身の認識を通して、存在することの本性を認識することによって、他の諸事物が存在者である限りにおいて、それらを認識すると主張した人々がいる。⁽¹⁾だから、そうではなくて、神は他のすべての事物を、それらが相互に区別され、神とは区別される限りにおいて認識することを示すことが残されている。すなわち、それは神が諸事物をその固有の特質に即して認識することである。⁽²⁾

419

さて、このことを示すために、神はすべての存在者の原因であることが前提とされる。このことは先に示されたところ（第Ⅰ巻第13章）から、ある程度まで明らかであり、さらに後で（第Ⅱ巻第15章）十分に示されるだろう。したがって、どの事物におけるいかなるものも、神は間接的にあるいは直接的にそれらの原因でないものはないということになる。ところで、原因が認識されると、その結果も認識される。したがって、神を認識すれば、神と事物との間にある中間的な原因のすべても認識されることによって、どのような事物におけるいかなるものも認識されうることになる。⁽³⁾ところで、神は自己自身と、自己とあらゆる事物との間にあるすべての中間的な原因を認識する。なぜなら、神が自己自身を完全に認識することは、すでに示されているからである（第47章）。ところで、神が自己自身を認識すれば、神から直接に由来するものをも認識することになる。⁽⁴⁾その神に直接に由来するものが認識されると、今度はそれらに直接由来するものを認識する。こうして、

(1) アヴェロエスなどアラビアの哲学者たち。

(2) 「Propria cognitio によって認識するとは、それぞれ個々のものをそれぞれ個々のものとしてその固有性において認識することであって、固有性を捨象して『一般的に普遍的に』認識することに対立する。 (...) 神が地上の個々のものについて固有の認識を有するとするのは神の知の尊厳を汚すものであると考えた人々（アラビアの哲学者たち）は、神御自身以外のものについての知は、普遍的一般的なものに過ぎないと主張する。」(山田晶)

(3) 電話帳に町のすべての電話番号が載っているとすれば、我々は電話帳を認識すれば、町のすべての電話番号を認識できるのである。設計士の頭の中にある建物のアイデアは、その建物のすべてを含んでいると同時にその建物の形相的原因でもある。神は物事を知り、物事の原因となるのはこれに似ている。なお、形相的原因と作用的原因（建物の場合は建設会社）の違いを念頭に置く必要がある。建物が完成した後に、その建物が感覚を通して人間に認知されるようになる。

(4) 誰それさんの知り合いとなれば、その人の家族、友達、近所を知るようになる。

最後の結果に至るまで、すべての中間の原因を認識する。したがって、神は事物のうちにあるいかなるものも認識する。ところが、事物のうちにある共通のものや固有のものをすべて認識することが、まさに事物についての固有で完全な認識を持つことである。したがって、神は事物が相互に区別される限りにおいて、事物についての固有の認識を持つのである。

420

その上更に、知性を通して作用する者すべては、その作られるものについて、固有の特性に即して認識を持つのである。⁽⁵⁾というのは、何かを作る者の認識は、作られるものの形相〔形〕を決定するからである。ところで、神は知性を通して諸事物の原因である。というのは、神の存在は、自らの知性認識であり、そしていかなるものも、現実態にある限り作用するからである。したがって、神は自分が原因となっているものを、他のものと区別されるものとして固有の仕方認識している。

421

さらに、諸事物における区別は偶然によることはありえないのである。⁽⁶⁾というのは、その区別は確実な秩序を持っているからである。したがって、諸事物における区別は、何らかの原因による意図でなければならない。だが、作用する何らかの原因の意図であるとしても、作用者の自然本性の必然性を通じてではない。というのは、自然本性は一つに限定されるのであって、それゆえに、いかなる事物についても、必然的な本性を通しての意図は、区別される限り、多数のものに向かうことはできないからである。⁽⁷⁾したがって、諸事物における区別は、認識を持つ何らかの原因の意図から生じることになる。ところで、事物における区別を意識することは、知性の固有性であると思われる。それゆえに、アナクサゴラスは区別の原理は知性であると語っている。⁽⁸⁾ところが、諸事物における区別の全般は、第二次的原因の何らかの意図によることはありえないのである。というのは、このようなすべての原因は、すでに区別された結果全体に属しているからである。したがって、万物についての区別を意識することは、自らを通して他のすべてのものから区別されている第一原因に属することである。それゆえに、神は区別されるものとして諸事物を認識している。

(5) 論文を書く著者がその論文の特徴を知っている。

(6) 例えば、コンビニでの品物の並べ方。

(7) 空気にある電気は普通、稲妻として地球に落ちるようになっているが、その稲妻が人を殺したとしても、それは意図されたものではない。地震は、様々な結果を生じさせるが、本性上の意図は、断層のズレを変えるだけである。

(8) 哲学者〔アリストテレス〕の『自然学』(VIII, 250b24-26; 265b22-23) 参照。

422

同じく、神が認識するものはどんなものでも最も完全に認識する。なぜなら、すべての完全性は端的に完全であるものとして、神のうちに存在することはすでに示されている(第28章)。ところで、一般的に認識されるものは、その完全性が認識されていない。⁽⁹⁾というのは、その事物に特有なもの、すなわち究極の完全性が知られていないからであり、その完全性によって、その事物に固有な存在が完成される。それゆえに、一般的な認識では、事物は現実態においてよりも可能態において認識される。したがって、神が自らの本質を認識しながら普遍的な仕方でも物を認識するからには、諸事物についての固有な認識をも持たなければならない。

423

その上更に、何らかの本性を認識するものは、どのようなものでも本性に自体的に付帯するものをも認識する。ところで、存在者である限りにおいて、存在者に自体的に付帯するものは、『形而上学』(第4巻第2章)で証明されたように、一であり多である。⁽¹⁰⁾したがって、神が自らの本質を認識しながら、存在者の本性を認識するからには、多性を認識することになる。ところが、区別なしに多数のものは理解されえない。したがって、神は諸事物を互いに区別される限りにおいて知性認識するのである。

424

さらに、何らかの普遍的本性を完全に認識するものはどのようなものでも、その本性が所有される様態についても認識する。例えば、白さを認識するものは、白さを多少の程度で受け入れるものをも知っている。ところで、存在のさまざまな様態によって、存在者のさまざまな段階が構成される。それゆえに、もし神が自己自身を認識しながら、存在者の普遍的な本性を知るならば、それは不完全に認識しているのではない。というのは、先に証明されたように(第28章)、すべての不完全は神から遠いからである。そのことから神は存在者のすべての段階を認識しているのでなければならない。それゆえに、神は自己以外の他の諸事物について固有な認識を持つことになる。

425

さらに、あるものを完全に認識するどのようなものでも、そのものの中にあるすべてのものを

(9) 本を読んでワイン一般のよさを知っているのと、具体的にいろいろなワインを飲んでみて知るよさの違い。

(10) 例えば、「人間」ということばが、「一人の人間」についても、「多数の人間」についても語られる。

認識する。ところで、神は完全に自己自身を認識する。したがって、神は能動的な力⁽¹¹⁾に即して自己自身のうちにあるすべてのものを認識する。ところで、万物はその固有な形相に即して、神において能動的な力⁽¹²⁾に即して存在している。というのは、神自身がすべての存在の原理だからである。したがって、神自身はすべての事物の固有な認識を持つのである。

426

その上更に、あるものの本性を知っているものはどのようなものでも、その本性が伝達可能であるかどうかを知っている。すなわち、動物の本性が複数のものに伝達可能であるということを知らないものは、動物の本性を完全に知らない⁽¹³⁾のである。ところで、神的本性は、類似性を通して伝達可能である。それゆえに、神は何らかのものがどれほどの様態で、神の本質に類似し得るかを知っている。ところで、形相の多様性は、諸事物がさまざまな様態によって神的本質を模倣していることによって存在している。それゆえに、哲学者〔アリストテレス〕は、自然の形相を「何か神的なもの⁽¹⁴⁾」と名付けている。したがって、神は諸事物についてそれらの固有な形相に即して認識を持っている。

427

さらに、人間とその他の認識するもの⁽¹⁵⁾において、諸事物の認識は、その多性において互いに区別されることに応じて認識される。したがって、もし神が事物をその区別において認識しないならば、神自身がかつても愚かな存在になってしまう。このようにして神はすべての人々が認識している「争い⁽¹⁶⁾」を認識していないと措定する人々に対して、哲学者〔アリストテレス〕は『靈魂論』(第1巻410b4-7)と『形而上学』(第3巻1000b3-9)において不合理だとしている。

428

さらに、このことを聖書の権威によって我々は教えられている。実際に「創世記」(1・31)にお

(11) 神と違って人間は認識に関しては可能態にあるので、絶えず新しい認識に開かれている。つまり、受動的立場にある。人間は認識を積極的に追及することがあるが、ここでは言われているのは心理学的なことよりも、形而上学的な事実である。

(12) つまり単なる可能態の状態ではない。

(13) お金を蒔き、水をやればお金のなる木になると思う人は、お金の本性は伝達不可能であるということを知らない。

(14) 『自然学』I, 9, 192a-16-17。

(15) 英知体、または天使。

(16) 哲学者〔アリストテレス〕においては「憎しみ」となっている。エンペドクレスなど、「前ソクラテス学派」の哲学者たちがギリシア神話について論じたことに由来する。

いて「神はお作りになったすべてのものをご覧になった。見よ、それは極めて良かった」と語られている。そして、ヘブライ人への手紙（4・13）において「神の御前では、隠された被造物は一つもなく、すべてのものが神の眼には裸であり、さらけ出されているのである」とある。

第51, 52章 知性認識されたものの多性がどのような仕方で神的知性のうちに存在するのかを探求するための根拠

429

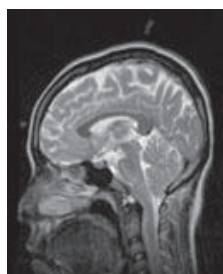
さて、知性認識されたものの多性が、神的知性のうちに合成を導き入れないように、その知性認識されたものの多性のあり方を探求しなければならない。⁽¹⁷⁾

430

ところで、この多性は多くの知性認識されたものが、神のうちでそれぞれ異なる存在を持つというように理解されることはできない。⁽¹⁸⁾なぜなら、その知性認識されたものが、神的本質と同じであることになってしまうからであるが、それは神的本質のうちに何らかの多性が指定されてしまうことになり、このことは先に何回かにわたり（第18, 20, 40章）排除されている。またあるいは、その知性認識されたものが神的本質に付加されたものになってしまうからであるが、それは神のうちに何らかの付帯性が存在することになり、それは先に（第23章）不可能であることを我々は示している。

MRI とは？

MRI は、Magnetic Resonance Imaging の略で、磁気共鳴画像といます。簡単に言えば、脳の写真です。生きている脳の断面図を、数ミリごとに写真にして見ることが出来ます。



<http://www.katobrain.com/profile/mri.html>

(17) 以下の議論はアヴィチェンナに由来する。

(18) 人間の場合、様々な認識はそれぞれ違う存在を持っている。例えば、自分自身を振り返る質問に答えたときに起こった脳内の代謝活動を MRI によって捉えた画像には、被験者の反応が見られる。各被験者とも、MRI 画像の向かって右側の前頭前野の部分に脳の活動が起こると共に、向かって左側の帯状回後部にも同時に活動が見られる（村本治、『神の神経学・脳に宗教の起源を求めて』、新生出版、2004年、75頁参照）。

431

さらに、このような可知的形相を実存するものとして措定することもできない。そのことはプラトンがイデア論を導入するにあたって先述の不都合を避けるため、措定したと思われる。だが、それは自然的事物の形相は質料なしに存在することはできないからであり、さらに自然的事物の形相が質料なしに知性認識されないからである。

432

さらに、このような可知的な形相が自体的に実存するものとして措定するとしても、このことは神が多数のものを知性認識することを措定するには十分ではない。というのは、前述の形相が神の本質の外で存在するのだから、もしその形相なしに神が多数の事物を認識できないならば — そのことができるのは神の知性の完全性のために必要とされるものだが — 神の完全性は知性認識において他のものに依存することが帰結されてしまうことになり、その結果、神の存在は神の知性認識であるから、存在することにおいても他のものに依存してしまうことになってしまう。だが、その反対のことが先に示されている（第13章）。

433

同じく、神の本質の外にあるものすべては後で示されるように（第Ⅱ巻第15章）、神によって原因づけられているので、もし先述の形相が神の外に存在するならば神によって原因づけられていなければならない。ところで、神自身は後で示されるように（第Ⅱ巻第23章）、知性によって諸事物の原因である。したがって、このような可知的なものが存在するためには、神の本性の秩序によってこれらの可知的なものを知性認識することがまず必要とされる。それゆえに、多くの可知的なものが神の外に自体的に実存することによって、神は多くのものを認識するのではない。

434

その上更に、「現実態にある可知的なものは、現実態にある知性と同じものである⁽¹⁹⁾」。そのことは「現実態にある可感的なものが、現実態にある感覚と同じものである⁽²⁰⁾」ことと同じである。だが、可知

(19) Aristoteles, De anima, III, 430a 2-5.

(20) Ibidem, 425b 25-26. 味覚を例にとれば、砂糖の甘さは「可感的なもの」であり、砂糖を味わうという人間の能力が「感覚的能力」である。砂糖が私にとって甘い味がするという事は、私が砂糖の甘さを味わっているということと同一の出来事である。砂糖が口の中に入れられるまでは、その甘さは現実態においてではなく、可能態においてのみ甘いのである。

的なものが知性と区別される限りにおいて、両者は可能態⁽²¹⁾である。それは感覚においても明らかである。なぜなら、視覚が現実態において見えるものとなり、可視的なものが現実態において見られるものになるのは、視覚が可視的なものの形象によって影響されるときだけであるから、そのようにして、視覚と可視的なものから一致したものが生じる。したがって、神の可知的なものが神自身の外にあるならば、神の知性は可能態にあることになり、同様に神にとっての可知的なものも可能態にあることになってしまう。それゆえに、神はそれらを現実態に導く何らかのものを必要とすることになってしまう。だが、それは何らかのものが神より先に存在することになるから不可能である。

435

さらに、知性認識されるものは、知性認識するものうちになければならない。したがって、神が諸事物の多数性を知性認識するためには、諸事物の形相が、神の知性の外で自体的に実存するものとして措定するのでは不十分であり、それらの形相は神の知性それ自身のうちになければならないのである。

第52章 可知的事物の多数性は神的知性以外にありえないこと⁽²²⁾

436

さらに、同じ諸議論から上述の可知的事物の多数性は、神的知性以外の別の知性、すなわち魂あるいは天使、または英知体のうちにあることを措定することはできないことが明らかである。

437

なぜなら、もし可知的事物の多数性が、神的知性以外の別の知性にあるとすれば、神的知性がそのある作用⁽²³⁾に関して、別の下等なる知性に依存することになってしまうからであるが、そのことも

(21) 最近、米カリフォルニア州サンディエゴ近郊のコロナド海軍基地にある兵舎が、上空から見ると、ナチスのハーケンクロイツ（カギ十字）に似ているとの指摘があり、米海軍は60万ドル（約6900万円）をかけて“改修”することになった。米メディアによると、兵舎は1967年の完成で、L字型の建物4つが並ぶ。最近、衛星画像を気軽に楽しめるインターネットのソフトウェア「グーグル・アース」の利用者が増えたことで、「カギ十字にそっくり」といううわさがネットへの書き込みなどで一気に広まり、ユダヤ系人権団体が不満を表明する事態となった。（<http://www.yomiuri.co.jp/world/news/20070927i414.htm>）建物は今までも存在していたが、上空から見ないとその形は見えてこない。つまり、可能態にあった。

(22) これはトマス自筆のタイトルではないが、伝統的に付けられるのである。“Quod huiusmodi multitudo intelligibilium non est nisi in intellectu divino”。

(23) つまり、物事に存在を与えるという作用。

また不可能である。

438

また、自体的に実存する諸事物が神に由来するように、したがって、諸事物の中に内在するものも神に由来している。それゆえに、何らかの下等なる知性のうちにある上述の可知的事物の存在について、神が原因となっているところの神的知性認識が前もって必要とされる。

439

また同じく、もし多数の可知的事物が神的知性以外の何か別の知性のうちに存在すると主張するならば、神の知性は可能態のうちにあることになってしまう。というのは、それらの可知的事物が神の知性に結合されていないからである。

440

またさらに、いかなるものも固有の存在を持っているのと同じように、固有の作用も持っているのである。したがって、ある知性がそれによって作用へと向けられることを通じて、別のものが知的作用を実行することはありえない。作用への傾性が見出されるところのその知性自身が知的作用を実現する。⁽²⁵⁾それは、いかなるものもそれ自身の本質によって存在し、別の本質によって存在するわけではないのと同じである。それゆえに、何か二次的な知性のもとに多数の可知的なものが存在

(24) ここでトマスはデミウルゴスのことを念頭においている。デミウルゴス（英語：Demiurge）は、プラトンの著作である『ティマイオス』に登場する世界の創造者である。（ギリシア語では「職人・工匠」というような意味である）プラトンは物質的世界の存在を説明するために、神話的な説話をつかった。この言葉と概念はグノーシス主義において援用され、物質世界を創造した者、すなわち「造物主」を指すのにデミウルゴスの呼称を使用した。この考え方は、ユダヤ教の思想家であるアレクサンドリアのフィロンや、異端ともされたキリスト教思想家のオリゲネスに影響を与えた。『ティマイオス』に記されている比喩的な寓話は、『旧約聖書』と調和性を持つのではないのかと彼らは考えた。

マルキオン主義の教義としては、「旧約聖書の神」と「キリストが説いた神」を区別する。

「旧約」の神は「律法の神」であり、世界（物質と靈魂の両方）を創造し、それを厳格な律法でもって治める神である。この神は正義の神ではあるが、恵みや愛というものがない。

いっぽうキリストの父である神は、「福音の神」であり、先の「律法の神」より高次の天界におり、完全な善と憐れみと愛を持つ神である。

しかし、この「福音の神」は、極めて高次の存在であり、低次の物質世界に住む我々は、その本質を完全に理解することはできない。ただ、この神と比較することによって、「旧約聖書」の神が、（善ではあるが）下等で「異邦の」神、デミウルゴスであることが確認できるという。つまるところ、マルキオンはグノーシス派の「二神論」を、律法と福音に対するパウロの思想と合体させ、これを極端に理解したものとも言える。

(25) 例えば、植物には太陽に向かう「傾性」がある。それは、植物の本質に属するものであり、そこから直接に作用へと向けられるのである。植物の場合は外部からの刺激があるが、神の場合それは認めることができない。

するということによっては、第一知性が多数のものを認識するといったことは出来ないであろう。

第53章 前掲の疑問の解決

441

さて、前掲の疑問は、知性認識される事物がどのようにして知性のうちに実存しているのかについて入念に吟味すれば、容易に解決されうるだろう。

442

我々が我々の知性から出発して可能な限り神的知性についての認識に進もうとしているので、我々によって知性認識された外部の事物は、その固有の本性に即して我々の知性のうちに実存するのではなく、我々の知性のうちに存在するのはその事物の形象でなければならず、それによって知性は現実態になることを考えなければならない。なお、このような形象を固有な形相として、それを通して現実態になりながら、知性は事物そのものを認識する。つまり、知性認識とは、熱するものが熱せられるものに伝導するような、知性認識されるものに伝導する作用ではなく、知性認識は知性認識する者のうちに留まる。だが、知性認識は、認識される事物と関係を持っている。というのは、上述の形象がある種の形相として知的作用の原理であり、その事物に類似しているからである。

443

その上さらに、知性が事物の形象によって形成されて知性認識しながら、自己のうちに知性認識された事物の何らかの概念を形成し、その概念 (intentio) はその事物の特質そのものであり、それは定義が意味表示したものであると考えなければならない。これはまさしく必然的なことである。すなわち、知性は事物が不在していても、現前していてもそれにかかわらず知性認識する。このことにおいて想像と知性は一致する。⁽²⁷⁾ところが、質料的条件なしには事物は現実では実存できないのであるが、知性はさらなる能力として、質料的条件と区別されたものとして事物を知性認識するこ

(26) 例えば、知性が鉄を知るといって鉄になるわけではない。病気について研究する医者はその病気にかからない。太郎君を知っている花子さんは太郎君にならない。

(27) 映画で見た「ゴジラ」を想像することと、今、目の前にいない自分のペットを思い出すこととは知性にとっては同じプロセスをたどる。

とができる。⁽²⁸⁾このようなことは、知性が前述の概念を自己のうちに形成しない限り、ありえないことである。

444

しかし、この知性認識された概念は、認識作用の終局のようなものであるから、知性を現実態にさせる可知的形象、認識作用の始まりとして考えるべき可知的形象とは、別のものである。ただし、両者は知性認識された事物に類似している。というのは、可知的形象は、知性の形相であり、知性認識の始まりであり、外部の事物に類似しているということによって、知性はその事物に類似した概念形成を生じさせるからである。なぜなら、「いかなるものもその存在に応じて作用するからである」。そして、知性認識された概念がある事物に類似しているということから、知性はこのような概念を形成するときに、その事物を知性認識したことになるのである。

文献の紹介

Antony J. P. KENNY, *Aquinas on Mind*, Routledge, London and New York, 1993.

A・ケニー著、川添信介訳、『トマス・アクィナスの心の哲学』、勁草書房、1997年。

本書は『神学大全』の中の人間の〈心 (anima)〉について論じた部分（第一部第75問～89問）についての注釈的解説である。このテーマについてこれほど包括的に、しかもテキストに即しながら解説をしているものはほかにないのである。人間論の中心課題である〈心〉（魂）についてのトマスの思想を紹介するものとして本書は読まれるだけの価値は十分あると思われる。

解釈の現代性は本書のもう一つの大きな特徴である。トマスの議論そのものに寄り添いながらその構造を分析するというだけでなく、ケニーは現代哲学の様々な立脚点を念頭において、トマスの思想の分析に用いている。トマスがヴィトゲンシュタインやライルとあたかも同時代人であり、彼らが同じ問題について論じ合っているかのような印象を受けるのである。

ただし、本書は確かに包括的な説明となっているのであるが、トマスの人間論はそれ以上に包括的であるので、訳者も「あとがき」で指摘しているように、不適當な面もあることは否定できない。人間の心の問題はトマスにとっては形而上学や存在論に結びついている。人間の心という存在は現実全体の重要な部分であっても、一部に過ぎないとも言えるのである。特に、

(28) 火星の上に植民基地(?)ができれば、そこでどのような生活を送らなければならないのかを、多分今頃専門家は具体的に考えているだろう。あるいは、まだ存在していない論文を頭の中で考えることができる。

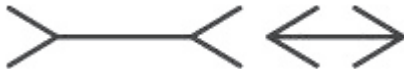
被造物としての人間は言うまでもなく神によって創造されたものとして理解しないかぎり、本当の人間理解にはならない。その意味で、人間の心を十分理解するために、神の本質は知性認識であることに対する理解を深めなければならないのである。

錯視

出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

錯視^{さくし}とは、視覚に関する錯覚のことである。俗に「目の錯覚」ともよばれる。生理的錯覚に属するもの、特に幾何学的錯視については多くの種類が知られている。

ミュラー・リヤー錯視



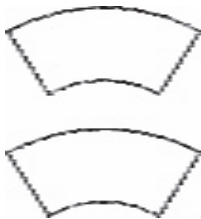
最もポピュラーな錯視の一つ。上のふたつの図形の中心の線分の長さは異なって見えるが同じ長さである。このような錯視を、サイズの錯視と言う。

ツェルナー錯視



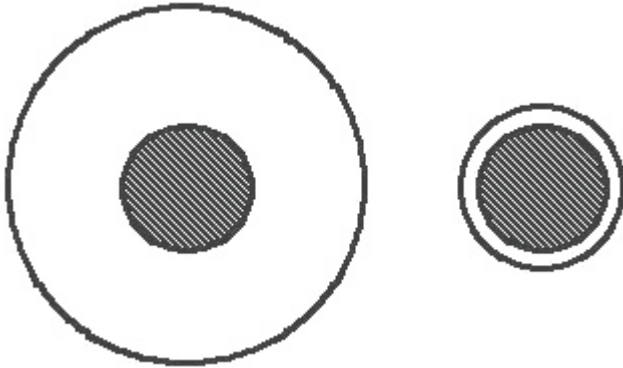
非常に有名な錯視の一つ。図にある4本の線分は全て平行である。羽の角度が鈍角であるほど、錯視は顕著になる。

ジャストロー図形



ジャストロー錯視ともいう。上の図形で、二つの扇形は同形だが、内側、即ち下の扇形の方が大きく見える。また、その応用で台形を上下に並べると必然的に上の台形が大きく見える。

デルブーフ錯視



デルブーフ錯視とも。二つ合同な円を描き、片方には外に大きな同心円、もう片方には外に小さな同心円を描くと元の円の大きさが異なって見える錯視。大きさが極端なほど錯視も顕著になる。応用として図形の中から別の図形をくりぬくと、くりぬいた部分が大きく見える。

3D ステレオグラムのこと

出典：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

ステレオグラムは、目の焦点を意図的に前後にずらして合わせることで、立体的に見ることが出来る画像のことである。人間は、片眼では焦点距離、物体の大きさ、重なり、明瞭さ、移動速度、両眼では、両眼視差、輻輳^{ぶくそう}などの情報を総合的に利用して立体を認識している。ステレオグラムは両眼視差を利用して画像を立体として認識させる。現実の立体を見るときには、両眼の位置の差から右眼と左眼では異なった像が写っている。この見え方の違いが両眼視差である。この2つの画像の差異を利用して脳は空間の再構築を行う。逆に、平面上の画像でも両眼に視差が生じるように映像を写すことで、脳に立体として認識させることが出来る。

この効果は、軍事的な場面で活用された。偵察機に搭載された解像度の低いカメラ2台によって同時に撮影された2枚の写真を片目ずつで同時に見ることにより、元の写真を単独で見るとよりも立体的に知覚でき、カムフラージュを見破ることができたのである。

3D ステレオグラムの見方

1. 目から力を抜きぼんやり見るような感じで焦点を画像に合わせないようにする。
2. 画像が段々ぼやけてくるのでさらにそのままぼんやり見る。
3. ぼやけた像が中央へと近づいてくる。
4. 中央へと来た像が融合して立体的に見える

図 A

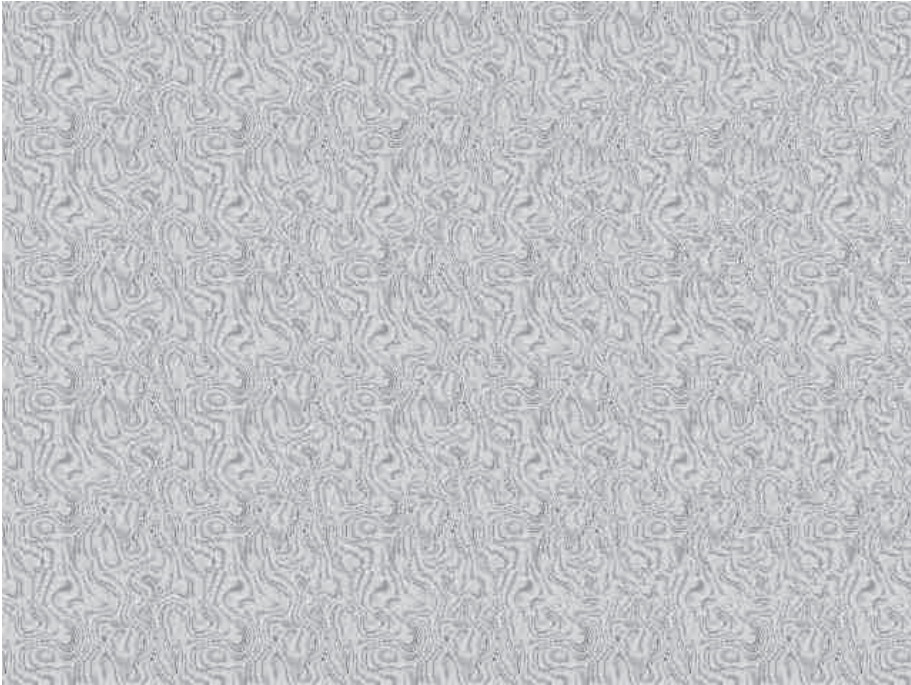


図 A の中にシルクハットが見えてくる。



<http://stereo.jpn.org/gallerie/hstereom.htm>

さて、神的知性は自らの本質以外のいかなる形象によっても知性認識しないことは先に示されている（第46章）。ところで、神の本質は万物に類似している（第29章）。したがって、このことから自己を知性認識する限りにおいて、神的知性の概念（conceptio）、すなわち神的知性の言葉は、神の知性そのものにも類似するだけでなく、神的本質が類似するようなすべてのものにも類似する。したがって、神的本質である一つの可知的形象を通して、また神的言葉という知性認識された一つ（⁽²⁹⁾）の概念を通して、多くのものが神によって知性認識されうるのである。（⁽³⁰⁾）

第54章 一であり単純である神的本質はどのようにしてすべての可知的なもの固有な類似性であるか

だがさらに、神的本質のような、一であり単純であるものが、それぞれ異なる諸事物の固有の概念であり、あるいは類似性であるということは困難であり、あるいは不可能であると、ある人は思われるかもしれない。

というのは、それぞれ異なる諸事物の区別は、固有な形相の特質を根拠としている以上、何らかのものに、その固有な形相に即して類似するものは、別のものにとっては類似しないものとして見なさなければならないからである。だが、それぞれ異なる諸事物が共通で何らかのものをもって

(29) 「始めに言葉があった」(In principium erat Verbum) という、ヨハネ福音書の有名な出だし、または「神は『光あれ』と言われた」(創世記) を思わせるところである。これはキリスト論と三位一体論につながるものであると思われる。認識論に限って言えば、ここで認識と言語の本質的なつながりがほめかされる。例えば、言葉を持たない赤ん坊の認識と、言葉を学びながら見聞を広げる子供のことを考えることができる。「私たちの心をつくり上げるとき、事の順序に注意を向けてみましょう。何かを言おうと考えるとき、私の心のうちにはすでに言葉があります。あなたに話そうとするときは、すでに私の心のうちにある言葉が、あなたの心の中にもあるためにどうすればよいのか、と私は考えます。すでに私の心のうちにある言葉があなたに届き、どうすればあなたの心の中に宿るかを求め声をうい、その声を使ってあなたに語ります。声の音は、あなたのもとに言葉の意味を運びます。そして、声の音が言葉を運び終わると、音は去ってしまいます。しかし、音があなたのもとに運んだ言葉は、あなたの心にとどまります。しかもそれは、私の心からも去っていくことはありません。」(聖アウグスティヌス司教の説教, Sermo 293,3: PL 38, 1328-1329, 『毎日の読書』, 待降節第三主日)。

(30) 人間はたくさんの概念によって諸事物を認識し、たくさんの言葉によって伝えるが、神はたった一つの認識によってすべての事物を知り、それらを存在せしめるのである。“Quo magis res singulares intelligimus, eo magis Deum intelligimus” (個々の事物を知れば知るほど、それだけ私たちは神を知ることになる) スピノザ, 『エチカ』 V, 24参照。

る限りにおいて、いかなるものもそれらが一つの類似性を持つことを妨げないのであり、それは人間とロバが動物である限りにおいて、一つの類似性を持つことと同じである。このことから、神は諸事物について、固有の認識を持つのではなく、共通の認識を持つことが帰結してしまう。なぜなら、認識の作用は、認識されたものの類似性が認識者のうちにある様態に即して帰結するからであり、それは熱くなることが熱の様態に即していることと同じである。というのは、認識者のうちにある認識されたものの類似性は、認識者が作用するところの形相として存在しているからである。したがって、もし神が多くのものについて固有の認識を持っているならば、神自身が個々のものについての固有の特質でなければならぬ。それはどのようにしてあるのかを探求されなければならない。

448

というのは、哲学者〔アリストテレス〕は『形而上学』第8巻で語っているように、事物の形相とそれを意味表示する定義は数に似ているからである。なぜなら、数において、ひとつの単位が付加され、あるいは差し引かれるときに、数の種類は変化するからである。それは二重や三重で明らかである。⁽³¹⁾ところで、そのことは定義においても同じことである。というのは、種差が加えられたり、除かれたりすると種が変化するからである。というのは、感覚的実体は「理性的な」種差が欠いているときと、「理性的な」種差がくわえられるときとは、種が異なるからである。

449

しかし、自らのうちに多数のものを含むものにおいては、知性と自然本性は同じあり方をしていない。というのは、何らかの事物の存在にとって必要とされるものどもをその事物の本性は分割された状態で受けつけないからである。なぜなら、もし魂が肉体から引き離されるならば、動物の本性は残らないからである。だが、知性は、存在において結合されている構成要素を、それらのうちのひとつが他の特質に属さない時に、時折、別々の状態で受け入れることができる。⁽³²⁾そして、このことによって知性は三のうち二だけを考察することができ、理性的な動物において感覚的なものだけを考察することができる。⁽³³⁾それゆえに、知性は多数のことを包括しているものを、その多数のことの固有な特質として受け取り、それらのうちのあることを他のものなしに把握している。なぜなら、

(31) 例えば、饅頭が二つ入っている土産と三つ入っている土産とは、値段も違うし、異なる商品である。二重の塔と三重の塔参照。

(32) 例えば、コンピュータにある「フォルダー」とその中にある複数の「ファイル」。あるいは人間の体全体と複数の「内臓」(肺は心臓の特質に属さない)。

(33) 現代の西洋医学のように、身体と精神を分けて考えるようなこと。

知性は十から単位の一が差し引かれたとしての九の固有な特質としての十を受け取り⁽³⁴⁾、同じく十に含まれている個々の数の固有な特質として受け取ることができるからである⁽³⁵⁾。そして、同じく知性は、人間において、非理性的である限りでの非理性的動物の範型を受け取ることができ、ある積極的な種差⁽³⁶⁾を付加しない限り、人間が含む個々の種に固有な範型を受け取ることができる⁽³⁷⁾。

450

それゆえに、クレメンス⁽³⁸⁾という名の哲学者は、「存在者においてより高貴なものは、より高貴でないものの範型である⁽³⁹⁾」と語った。

451

さて、神的本質は自らのうちに、それは合成の様態ではなく完全な様態においてであるが、すべての存在者の高貴さを含んでいることが先に示された⁽⁴⁰⁾（第31章）。ところで、固有であれ、共通であれすべての形相は、それがあつるものを存在させる限り一定の完全性であるが、真の存在に達しない場合を除いて不完全性⁽⁴¹⁾を含まない。したがって、神的知性は自らの本質において各々のものの固

(34) 十進法的に考えた場合。十進法とは、10およびその冪（べき）を基準にして数を表す方法である。この10を底（てい）と呼ぶ。

(35) 「四捨五入」(数の丸め) 参照。

(36) 例えば、羽やうろこのついた存在者。

(37) 例えば、背の低い人と背の高い人。金髪と黒髪。太った人とやせた人。ネアンデルタール人と北京原人。

(38) クレメンス（150頃—211/215頃）、3世紀のアレクサンドリア学派の教父。引用は *Stromata*, VIII, 9からである。

(39) Dionysius, *De Divinis Nom.* V, 9。トマス時代にはクレメンスの著作は直接に知られていなかった。Franciscus Ferrariensis という注解者によれば、この命題は普遍的な命題ではなく、何かに関するものである（“quod inquit Clemens non est verum quantum ad propriam rationem universaliter, sed quantum ad aliquid” . FRANCISCUS DE SILVESTRIS FERRARIENSIS, *Commentaria in Summam contra Gentiles S. Thomae Aquinatis*. Ed. Léonine, Rome 1918-1930）。10という数字はより高貴なものと思えば、9はそれより劣るものであり、10という「範型」に差し向けられ、照合されると同じように、理性的存在者は非理性的存在者の「範型」となる。例えば、スポーツにおいて一定の記録は範型となり、大会出場の日安となり、それ以下の結果はそれに照合される。

(40) 第44章377参照。人間の知性は自らのうちに万物を懐くことができるので、「ある意味において万物である (est quodammodo omnia)」(アリストテレス) との平行で、神のうちに万物の完全性がある。人間の認識能力のあり方の分析から、類比論を通じて、神のうちに於ける認識のあり方を推測できるという考え方に基づいている。

(41) 例えば、「うどん」という形相は調理師を通してものとなつておいしくいただけるときは、それは一定の完全性である。それはある店のすべてのうどんについて言える（共通の形相）し、今、目のまえにあるこの（きつね）うどん（固有の形相）についても言える。うどんはうどんとして完璧なものである。ただし、調理に失敗しておいしくないうどんになってしまう（「真の存在に達しない」）場合は不完全性を含んでいる。

有性を含むことができるが、それは神的知性が、各々のものが神的本質を模倣していることや、各々のものが神的本質の完全性に達しないことを知性認識することによってである⁽⁴²⁾。すなわち、神は神的本質を、認識の様態ではなく、生命の様態で模倣されうるものとして知性認識するときに、植物の固有な形相を捉えることになる⁽⁴³⁾。また、もし神が神的本質を、知性認識の様態ではなく、認識の様態を通して模倣されうるものとして知性認識するときに、動物の固有な形相を捉える⁽⁴⁴⁾。他のものについてもこのようなことである。したがって、このようにして神的本質は絶対的に完全である限りにおいて、個々のものの固有な特質として受け入れられうることは、明らかである。それゆえに、神は神的本質を通して万物の固有な認識を持つことができる⁽⁴⁵⁾。

ヘーゲルとの比較

「精神は、二つの逆の命題となって現れた二つの側面をもっている。その一方は、実体が自己自身を外化して、自己意識となる側面であり、逆に他方は、自己意識が自分を外化して、物となり一般的自己となる側面である。こうして両側面は互いに迎え合い、そのためここに両者の真の統一が生じている。実体が外化し自己意識となることは、対立に移行することを、必然性が無意識の間に移行することを表しており、実体が自体的には自己意識であることを表している。逆に自己意識が外化するということは、それが自体的には一般的実在であるということである、このことをいいかえれば、自己は、その反対においてそのまま自己のもとに在るような、精神自独存在であるから、実体が自己意識であり、まさにこのために精神であるということが、自己意識に自覚されていることになるのである。それゆえ、実体という形式を捨て、自己意識という形をとって定在に歩みいる精神について、言われることは、自然上の生殖という

(42) 最高のうどんを知っている者は、それ以下のうどんを「範型」に照合して位置づけるのである。スポーツの最高記録とそれ以下の結果も同じである。

(43) また、イエスは言われた。「神の国は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。土はひとりでに実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる。実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫の時が来たからである。」更に、イエスは言われた。「神の国を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。それは、からし種のようなものである。土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る。」(マルコ4:26-32)

(44) 動物には認識能力はあるが、知性的な認識ではないという意味。

(45) 神は自分自身の本質をそれ自体として考えることもでき、また自らの本質を模倣の対象として考えることもできる。いわゆる、二つの「側面」を持っていると言えそう。Si parva licet(このような例え方は大胆すぎるかもしれないが)、少女は自分自身のことを考え、自分の真似として飾ったお人形さんを通じて自らを客観化したかたちでとらえるようなもの。

関係を利用して言えば、精神がもっている母親は現実的であるが、父親は自体的に存在しているということである。(処女懐胎) なぜならば、現実または自己意識と、実体としての自体とは、精神の二つの契機であり、その各々が他方となって互いに外化することにより、精神は、両者の統一として定在することになるからである。

だから自己意識は、すでに自らの対象が自己でもあれば、存在でもあることを、すべての定在が精神的実在であることを、知っている。」

(…)

「神の実在が人間になること(受肉)、言い換えれば、神の実在が直接そのまま自己意識の形態をもつこと、これが絶対的宗教の単純な内容である。(…)というのは、精神とは、自己の外化において自己自身を知ることであり、自らの他在にしながら、自己自身との等しさを保ったままで、動いているような実在である。」

(ヘーゲル、『精神現象学』(樫山欽四郎訳)、河出書房、昭和41年、421頁以下、一部変更)

人類は進歩し、世界は発展している。ロマンに満ちた近代の人々は、このヘーゲルの主張を、ほとんど直感的に信じた。自然科学における数々の新しい発見があり、その発見に基づいた発明がされ、人々の生活は著しく「便利なもの」で満ち溢れ、世界が急速に広がり始めたのを感じていたからである。しかし、ヘーゲルの主張は、実際は、こうした直感的に感じられるような安易な進歩主義とは全く異なるものを含んでいる。彼は、まず、絶対者(神)というものが、それが無限の絶対者である以上、すべての有限なものを含んだものであるはずだ、というところから出発したのである。絶対者は、この世界とは別に、この世界に対立してあるのではなく、この有限な世界のすべてを含み、宇宙を内包するものであるというのである。これは、「絶対者」ということを論理的に考えていけば当然そうなると言える。すべてを内包しないものを無限の絶対者と呼ぶことはできない。

そして、この「絶対者」は、この世界の有限なものとは全く無関係にあるのではなく、有限なものを媒介として自己自身を発展・展開する絶対者である、とヘーゲルは考えた。絶対者は有限なものとの関わりをもち、その変化(発展)の過程をとおして自己を発展させる、と言うのである。従って、この世界の有限なものは、絶対者の自己展開の一つの段階を現しているもの、ということになる。ここに、世界のすべては神の具現であるという汎神論の煙が立ち上る。

ヘーゲルは、この絶対者を絶対精神とか絶対理性、あるいは世界観の関連で言えば、世界精神という言葉で表したが、この絶対者が有限なものを内包しており、これを媒介としているのであるから、その認識においては、有限なるもの、つまり、この世界のことがらから出発し、次第に認識を深めて、有限なものの変化の過程において自己を発展させる絶対者の把握にいたらなければならない、と考えた。

そして、この認識の過程を「弁証法」と呼び、3段階の過程を経て展開していくと考えた。第一は直接的段階で、ある一つの内容（認識）を肯定し、これに固執していく段階で、これを「即自態（These）」とも呼んだ。

次に、この内容（認識）を反省していくに従い、それに含まれていた矛盾が明らかになる段階で、これを「対自態（Antithese）」と言う。

そして、三番目に、この矛盾を止揚する高次の段階へと進んでいく「即且つ対自態（Synthese）」の段階へと向う。

さらに、この高次の段階も、その矛盾を明らかにしてくるので、それを止揚するより高次の段階へと進み、こうして絶対者の具体的把握に到達していく、と言うのである。

これは、たとえば、「歴史」と言うものを考える時、たとえば、ある出来事が起こったとしよう。やがて、この出来事の問題点や矛盾が明らかになり、全く反対の出来事や事件が生じる。そして、先の出来事と後の反対の出来事を止揚する形で、新しい出来事が生じ、こうして世界史は、一つの到達点に向かって進んでいく、ということになる。

この世界が向かう到達点を、ヘーゲルは「世界精神」とも呼んだ。これは、「救済史」や「摂理」というキリスト教神学的な概念の世俗化といってよい。

この歴史観は、やがて、資本主義の世界からその矛盾を解消する共産主義が起き、それが止揚されて、新しい万人の自由な世界が登場すると考えるマルクス主義に受け継がれていくものとなった。ともあれ、ヘーゲルは世界を絶対者・絶対精神の発展の一つの段階と考え、すべての存在するものは、その発展のための媒介と位置づけたのである。

しかし、この考え方では、人間や世界は、発展のための道具となり、人間は絶対者・絶対精神の「あやつり人形」となってしまう。ヘーゲルの哲学とその延長にあるマルクス主義の問題点は、ここにある。

「滅私奉公」や全体主義も、あるいは「会社のため」、「国のため」を主張する思想も、その延長にあると言っても過言ではないかもしれない。たとえば、日本の教育の背後にある進歩主義や「みんな」という全体主義には、ヘーゲルの亡霊がうごめいているようなものである。

もっとも、ヘーゲル自身は、絶対精神で「理性」や「自由」ということを考えていたが、歴史や世界の「目的」を急ぎすぎたのかもしれない。

しかし、ヘーゲル以後、世界観の観点からいえば、全体的で統一のとれた世界観を提示する思想は、あまり現れていない。世界について、人々は、自然科学が提示する唯物的な世界観を受け入れてきた。世界は物質の集合体に過ぎない、というわけである。ヘーゲルは19世紀半ばに没し、19世紀後半から20世紀にかけて、「世界」を取り扱う哲学は衰退し、哲学もまた、他の諸科学同様細分化されたのである。

宇宙の果てまで、実際に望遠鏡を使って見ることができるようになった現代人にとって、宇宙や世界は、ただ、意味もなくそこに存在しているだけのものとなり、「世界」を全体的に思考することは、あまり意味のないことになったのである。ただ、人間の精神はこの無意味性に耐えられないところがあり、そのために多くの「偽り」を生んだり、幻想に酔ったりする。

世界は、一面では、それ自体においては物質である。世界の中に内包されているすべてのものは、たとえば生命や精神、意識、思考なども、この物質から生じてくる。

しかしまた、他面では、宇宙像が人間の思惟の延長上のものでしかないとしたら、世界は「精神そのもの」になってしまう。しかし、世界を精神そのものと理解しても、その思考は常に限界をもっている。

結局、世界全体を問う問いの前で科学的知識は挫折せざるをえない。科学的認識にとって、「世界は引き裂かれたまま」(ヤスバース)である。

現象する諸対象は無限に研究されるべきである。これは科学の宿命的課題でもある。しかし、科学的研究は、世界のある一定の領域の中で妥当する統一理念によって導かれるのであり、全体を把握する理念ではありえない。

人間が科学的知識によって、それがどんなに膨大なものであったとしても、世界全体についての総合的で統一のとれた世界理解を提示することはできない。別次元の認識でなければならない。それは哲学（形而上学）であり、神学である。

世界や人間は、何かある意味や目的をもって存在している、ということをヘーゲルほど明瞭に打ち出した思想はないと言われている。カントは哲学（形而上学）的認識に厳しい制限をつけていたので、宗教を語ることは難しくなっていた。例えば、神の在り方について何も言えなくなった。ヘーゲルはその欠点を補い、カントの形而上学を発展させようとしたが、別の問題を残した。今やカントとヘーゲルを見直しながら、もう一度トマス为解决策に耳を傾ける時代になったと思われる。

452

さて、甲の固有な特質は、乙の固有な特質から区別される。また区別は多数性の原理であるから、神的知性における知性認識された特質の何らかの区別と多数性を、異なったものの固有な特質は神的知性のうちにある限りにおいて、考察しなければならない。それゆえに、神が固有性を知性認識するのは、各々の被造物が神に対して持っている類似性に関してであるから、神的知性の中にある諸事物の特質が多数であり、区別されていることは、神が、諸事物が多数で多様な様態によって神に類似可能であることを認識している限りにおいてである。

453

このことに即して、アウグスティヌスは神が人間と馬を別々の特質によって創造したと語り、そして、「諸事物の特質」は多数な仕方によって神の精神のうちにあると語っている。⁽⁴⁶⁾

454

またさらに、このことについてアイデアを措定するプラトンの見解、つまり、質料的な諸事物において存在するすべてのものがアイデアに即して形成されるという見解もある程度保持される。⁽⁴⁷⁾

Michael Heller, Deciphering the Mind of God.

[In a copy of his [Leibniz] Dialogus, in the margin we find a short sentence written in his own hand. It reads: "When God calculates and thinks things through, the world is made."

(...)

Perhaps now we better understand Leibniz's idea of God's creating the universe by thinking mathematical structures through. We should only free the above sketched image of creating physical theories from all human constraints and limitations, and take into account a theological truth that for God to intend is to obtain the result, and to obtain the result is to instantiate it. Einstein was not far from Leibniz's idea when he was saying that the only

(46) "[Q] uis audeat dicere Deum irrationabiliter omnia condidisse? Quod si recte dici vel credi non potest, restat ut omnia ratione sint condita, nec eadem ratione homo qua equus; hoc enim absurdum est existimare. Singula igitur propriis sunt creata rationibus. Has autem rationes ubi esse arbitrandum est nisi in ipsa mente Creatoris? Non enim extra se quidquam positum intuebatur, ut secundum id constitueret quod constituebat; nam hoc opinari sacrilegum est. Quod si hae rerum omnium creandarum creatarumve rationes divina mente continentur". (S. Aurelii Augustini OPERA OMNIA - PL 40, De diversis quaestionibus octoginta tribus, q. XLVI, 2)

(47) 第51章431参照。

goal of science is to decode the Mind of God present in the structure of the universe.]

(www.firstthings.com/onthesquare/?p=997)

Michael (Micha?) Heller はポーランドの宇宙論研究者でカトリック聖職者であり、2008年度の（宗教と科学の「ノーベル賞」と言われる）Templeton Prize の受賞者である。上記の引用は受賞した際に述べた声明からとられている。

第55章 神は万物を同時に知性認識していること

455

さて、先のことから、神は同時に万物を知性認識することが明らかである。

456

というのは、我々の知性は、同時に多くのものを現実態において知性認識できないからであり、それは、「現実態の知性が現実態の知性認識されたもの⁽⁴⁸⁾」であるから、もし、複数のものを同時に現実態において知性認識したら、知性が一つの類に即して同時に複数のものになってしまうからだが、これは不可能である⁽⁴⁹⁾。ところで、「一つの類に即して」と述べたのは、いかなるものも同一の基体がさまざまな類のさまざまな形相によって形相化されるのを妨げるものではないからであり、それは同一の物体が形をもつと同時に色をもつことと同じである⁽⁵⁰⁾。ところで、知性が現実態における知性認識されるものと形相化されるのは可知的形象によってであるが、可知的形象のすべては一つの類に属している。というのは、可知的形象は形象のもととなる諸事物が一つの存在根拠を持っていなくても、可知的であることに同一の存在根拠を持っている。それゆえに、魂の外にある諸事

(48) 第51章434参照。

(49) 同時に甘いものとすっぱいものを口にすると、我々は甘さやすっぱさを単独で感じるよりも、それらを合わせた別の部類のものを認識する。それは、例えば、酢豚の「甘酸っぱさ」である。

(50) 例えば赤色の目立つ、丸い形をした酢豚の場合、色と輪郭と味といったそれぞれ異なった類の認識は同時に可能である。けれども、実際の認識の獲得プロセスにおいて全体を認識した後に部分を意識したり、あるいは部分を認識した後に全体を意識するのである。つまり、それぞれの類の認識の間に時間的なズレがある。

物の相互矛盾にもかかわらず、可知的形象が矛盾することもないのである。⁽⁵¹⁾このことゆえに、ある多数のものが、何らかの仕方によって結合したものと受け取られるときに同時に知性認識されるのである。⁽⁵²⁾というのは、知性は同時に連続した全体を知性認識するからであり、部分ごとに知性認識するからではない。同じく知性は同時に命題を知性認識するのであって、最初に主語、次に述語を知性認識するのではない。なぜなら、知性は全体の持つ一つの形象に即して部分全体を知性認識するからである。

457

それゆえにこのことから一つの形象によって認識される複数のものはどのようなものでも同時に知性認識されることを我々は理解することができる。ところで、神は知性認識するものすべてを、自らの本質であるところの一つの形象によって認識する（第46章）。したがって、神は万物を同時に知性認識することができる。

458

同じく、認識能力は意図がない限り現実態において何も認識しない。それゆえに、身体器官の中で保存されている表象は、時々、現実態において我々は認識しておらず、それは意図が表象に向けられていないからである。実際、⁽⁵³⁾意志によって作用するものにおいてはその他の能力を現実態へと動かすのは欲求である。したがって意図が同時に向かっていない場合、我々は多数のものを同時に見て取ることはない。それに対して、一つの意図のもとに入らなければならないものは、同時に知性認識されなければならない。というのは、二つのものの比較を考える人は、両者に意図を向け、同時に両者を見て取るからである。

459

ところで、神的知識のうちにあるすべてのものは、一つの意図のもとに置かれることが必然である。というのは、神は自らの本質を完全に見ることを意図しているからである。これは自己自身を

(51) 電磁波（光）によって網膜に焼かれるイメージは視神経を通じて脳に送られる。その際、イメージのデータは記号化される。それはコンピュータで写真がピクセル（画素）、デジタル的データとされることに似ている。振動によって耳に届く音も内耳神経を通じて、やはり記号化されて脳に送られる。画像と音は物質世界ではまったく異なった（相互に互換性のない、矛盾した）ものであるが、脳のうちには矛盾なく共存できる。

(52) 例えば映画を見るとき、画像となった人物は音を発生していると感知される。

(53) 例えば、助手席に座っている友達と熱心に話しながら車を（いわゆる自動措置的に）運転するときは、前方を漠然と見ることがある。そしてカーブを曲がって赤信号が見えてくると、注目するようになる。あまり関心のないテレビ番組も同じであろう。

自らの能力全体に即して見ることであり、その能力のもとにすべてのものが含まれている。したがって、神は自らの本質を見ながら、同時に万物を見て取っているのである。

460

さらに、知性が連続的に複数のものを考察する時には、その知性に一つの作用だけが属することは不可能である。というのは、作用は対象に即して異なっているから、最初のを考察する知的作用と次のものを考察する知的作用とは異なっていなければならないからである。⁽⁵⁴⁾ところで、神的知性には自らの本質である一つの作用しか属していないことが、先に証明された(第45章)。したがって、神的知性は自身が認識するすべてのものを連続的にではなく、同時に知性認識するのである。

461

その上更に、連続性は時間なしに知性認識されることはないが、時間も運動なしに知性認識されることはない。というのは、時間は「前後に即した運動の尺度」⁽⁵⁵⁾だからである。ところで、神においていかなる運動も存在することがありえないことは、上述したことから(第13章)えられることである。したがって、神の考察において、いかなる連続性も存在しえない。このようにして神は認識するすべてのものを同時に考察するのである。

462

同じく、神の知性認識は、神の存在そのものであることは、上述のことから明らかである(第45章)。ところで、神の存在において前後があるのではなく、すべてのものが同時に存在することは先に示されている(第15章)。したがって、神の考察は前後を持つのではなく、万物を同時に知性認識するのである。

463

さらに、あるものを知性認識した後に、別のものを知性認識するすべての知性は、ある時には可能態において知性認識し、またある時には現実態において知性認識する。というのは、知性は、第一のものを現実態において知性認識する時には、第二のものを可能態において知性認識するからである。⁽⁵⁶⁾ところで、神的知性は決して可能態のうちにあるのではなく、常に現実態において知性認識

(54) 例えば、ソムリエがワインの色と味および香りから年代、種類、産地などを判断する。

(55) 『自然学』第4巻219b1-2。

(56) ソムリエは色を観察するときに、まだ味を認識していない。

する。したがって、神的知性は連続的に事物を知性認識するのではなく、同時にすべてを知性認識するのである。

464

さて、この真理について、聖書も証言を与えている。というのは、「ヤコブの手紙」(1・17)において次のように語られている。「…御父には、移り変わりも、天体の動きにつれて生じる陰もありません」。

第56章 神の認識は習慣的ではないこと

465

さて、先のことから、神において習慣的な認識はないことが明らかである。

466

というのは、習慣的な認識のある者においては、同時に万物を認識するのではなく、あるものについては現実態において認識しながら、別のものについては習慣的に認識するからである。⁽⁵⁷⁾ところで、神は先に証明されたように(前章)、万物を同時に現実態において知性認識するのである。したがって、神において習慣的な認識はないのである。

467

さらに、習慣的な認識を持ちながらそれを意識していない者は、ある意味において可能態のうちにあるが、しかし、知性認識する前とは別の意味においてである。⁽⁵⁸⁾ところで、神的知性はいかなる様態においても可能態のうちにはないことはすでに示されている(第45章)。したがって、神のうちにはいかなる様態においても習慣的な認識はないのである。

(57) 「大脳皮質が担う意識的な思考は、鍛錬され体得されると、小脳や大脳基底核など脳の深部に^{もぐ}潜る。自転車にのるのも、靴ひもを結ぶのも、最初は考えながらだが、慣れれば体が覚えて自動化される。」(「日本の知力」, 読売新聞, 2008年2月25日朝刊, 1面) 自転車をこぎながら道端にある柵の木を認識するのは「現実態」の知性認識にあたる。

(58) 骨折してしばらく自転車に乗らないと、再び乗るためにリハビリをしなければならない場合がある。初めて自転車の乗り方を学ぶのとは意味は違う。受験生は実際の試験問題に直面して、数年前から学んだ英語の文法を思い出せない場合は、やはりその認識はないわけではないが、可能態の状態にある。

468

その上さらに、習慣的に何らかのものを認識するすべての知性において、意識することそのものである自らの知的作用とそれの本質は別のものである。というのは、習慣的に認識する知性にはその知的作用が欠けているからであるが、その本質がその知性にないことはありえないからである。ところで、神において、自らの本質は自らの作用であることは、すでに示されている。したがって、神の知性において、習慣的な認識はないのである。

469

同じく習慣的にのみ認識している知性は、自らの究極の完全性にはない。というのは、最善である幸福は、習慣に即してではなく、現実態に即して措定されているからである。⁽⁵⁹⁾したがって、もし神が自らの実体⁽⁶⁰⁾を通して習慣的に認識しているならば、自らの実体に即して神は普遍的な意味で完全ではなくなってしまう。だが、この反対のことが先に示されている（第28章）。

470

さらに、神自身は自らの本質を通して知性認識するのであって、その本質に付加された何らかの可知的形象を通して知性認識するのではないことは、すでに示されている（第46章）。ところで、習慣の状態にあるすべての知性は何らかの形象によって認識する。というのは、習慣とはある知性に可知的形象を受け取る能力を与えることであるから、それによって知性は現実態において知性認識するものとなる。あるいは、習慣とは知性において完全な現実態に即してではなく、可能態と現実態の間にある中間的なあり方として実存している知性それ自身の形象の秩序づけられた集合体のことだからである。⁽⁶¹⁾したがって、神において習慣的な知識はありえないのである。

471

さらに、習慣はある種の性質である。ところで、神においてはいかなる性質も付帯性もありえないことは、先に証明されている（第23章）。したがって、習慣的な認識は神に適合しないのである。

(59) アリストテレス、『ニコマコス倫理学』第1巻(1098b31-1099a7)を参照。例えば、マラソンの走り方を知っている選手は、実際のマラソンを完走してこそ幸せと言える。アリストテレスにとって、人間の営為にはすべて目的があり、それらの目的の最上位には、それ自身が目的である「最高善」があるとした。人間にとって最高善とは幸福、それも卓越性（アレテー）における活動のもたらす満足のことである。幸福とは快楽を得ることだけではなく、政治を實踐し、または人間の靈魂の固有の形相である理性を發展させることが人間の幸福であると説いた。

(60) 神において実体と本質とは同じものである。

(61) 例えば、お茶の稽古においては「ふくささばき」を練習して、「何気なく」(つまり、無意識的に)できるまで練習する。スポーツ選手の「イメージ・トレーニング」参照。

- a) さて、ある者が習慣的に考察し、意志し、行動するという状態は眠っているものの状態に類似しているから、ダビデは神から習慣的な状態を取り去るために次のようなことを語っている。「見よ、イスラエルを見守る方はまどろむこともなく、眠ることもない…」。〔詩編〕(121・4)
- b) ここからまた、「シラ書〔集会の書〕」(23・19)において次のように語られている。「…主の目は太陽よりも一万倍も明るく…」⁽⁶²⁾。というのは、太陽は常に現実態において輝いているからである。

第57章 神の認識は推論的でないこと

473.

さて、ここからさらに神的思考は推論的⁽⁶³⁾あるいは物語的⁽⁶⁴⁾ではないということが得られる。

474

実際、我々が一つの考察から別の考察へと推移する時、我々の思考が推論的である。それは三段論法に従って、原理から結論へと推移するような時である。実際、人が推論をするときあるいは物を語るのは、前提と結論両方を同時に考えながら、結論が前提からどのように帰結するかを、吟味することではないのである。実際、このことは推論をしているときに生じるのではなく、推論について判断することによって生じるのである。⁽⁶⁵⁾それは認識が質料的なものについて判断するからといって、認識が質料になるわけではないことと同じである。⁽⁶⁶⁾ところで、神は一つのものから別の

(62) 「彼が恐れるのは、人の目だけである。彼は知らないのだ。主の目は太陽よりも一万倍も明るく、人間のすべての歩みを見極め、隠れたところまでも、お見通しであることを。万物は、創造される以前から主に知られ、また、その完成の後も、同様である。」

(63) 人間は三段論法のように物事を認識していくプロセスをたどっていくが、神は同時に万物を認識する。人間の直観 (intuition) に例えることができる。

(64) *Cognitio discursiva*。英語の *discourse*「談話」、 「言葉の連続体」を参照。物語は継起する諸々の出来事から成るので、筋によるそれらの構成を要する (P. Ricoeur, *Temps et récit*, 1983-1985. リクール著・久米博訳『時間と物語』, 新曜社, 1987-1990参照)。映画や小説を途中から見ると分からない。

(65) 「ソクラテスは人間である」(小前提), 「人間は死すべきものである」(大前提), 「ソクラテスは死すべきものである」(結論)。このように三段論法はまさに段階をふまえて成り立つ認識である。分かったのは「ソクラテスは死すべきものである」ということである。今度はこの特定の推論は妥当かどうかを判断する時は、やはり三段階を同時に考えるわけで、そこから分かってくるのは、「妥当である」ということである。映画や小説の筋にも前と後がある。前を知らなければ後を理解できない。映画を見た後は総合的に判断して「いい映画」であったと言う。

(66) 地べたにあるのは、石なのか固まった泥なのかを判断するときに、知性は石や泥にならない。知性は判断するときに、総合的に (つまり、段階をふまえずに) 考えることがあっても、それは知性が本質的に総合的な能力であるということの意味しない。人間は認識を獲得するためにどうしても時間がかかる。一人前になるために十数年学校に通わなければならない理由はここにある。

ものへと連続的に考察するのではなく、同時に万物を思考することが先に示されている（第55章）。したがって、神は、すべての推論や物語を認識していても、神の認識は推測的でも物語でもないのである。

475

同じく、推論によって認識する者はすべてそれぞれ別々の考察によって原理と結論を見ている。というのは、もし原理が考察されること自体から結論がすでに考察されるならば、原理の考察から結論の考察へと進む必要がないからである。ところで、神は自らの本質である一つの作用によって万物を認識することが先に証明されている（第46章）。したがって、神の認識は推論的ではないのである。

476

さらに、すべての推測的な認識は、幾分の可能態と幾分の現実態を有している。というのは、結論は原理のうちに可能態にあるからである。⁽⁶⁷⁾ところが、神的知性においていかなる可能態もありえ

(67) “Parvus error in principio magnus est in fine”（最初のごくわずかな誤謬も結論には大きな過ちとなる）。アリストテレス, De coelo et mundo, I (271b8-13)およびDe ente et essentiaの冒頭を参照。例えば、若い時に苦勞せず生きていけると思っていたら、年をとったときにはどうなるだろうか。「若い時の苦勞は買ってでもせよ」という諺を参照。

(68) 推理小説では、犯人の発見につながる情報は原因となる。

(69) アリストテレス, 『分析論後書』一巻 (71b18-19)。この書物は、アリストテレスの死後、集大成された『オルガノン』(Organon)に入れられて、これを元に中世から20世紀まで論理学の研究が行われてきた。これについてカントは次のように言っている。

「知性の特殊な用法についての論理学には、特定の対象について正しく物を考えるための法則が含まれている。普遍的な用法についての論理学が「基本的な論理学」と呼ぶことができるのに対して、特殊な用法についての論理学は哲学のような特定の学問のためのオルガノン(道具)と呼ぶことができる(=アリストテレスの論理学に関する一連の著作は哲学のための道具すなわちオルガノンと呼ばれている——引用者注)。

このオルガノンとしての論理学は大抵の場合、学校で特定の学問の入門用に教えられるが、この論理学は人間の理性の働きからすれば最後に来るものであって、その学問が出来上がって、あとは最後の修正を経て完成を待つのみという段階になってやっと理性が手に入れるものなのである。なぜなら、人はある対象についてかなり高度な知識を手に入れた後でなければ、それについての学問を生み出す法則を提示することなどできないからである。」(カント『純粹理性批判』(第二版) 超越性に関する基礎理論(超越的原理論 [Elementarlehre]) 第二部門、超越的な論理学、序 超越的な論理学の構想、I 一般的な論理学について)。

「カントの有名な言葉に依れば、『論理学はアリストテレス以来一歩も前進しないし、又一歩も後退しない』という。ところがこれは論理学を『形式論理学』として哲学史より切り離れた結果いえることである。元来、論理学はアリストテレスにあっては形而上学と離れたものではないので、オルガノンあつてのメタピュジカ、又メタピュジカあつてのオルガノンですらあつたのである。」(松本正夫, 『存在の論理学研究』, 岩波書店, 昭和19年, 1頁。仮名遣い一部変更。)

ないことが、先に示されている（第16章）。したがって、神の知性は推測的ではないのである。

477.

さらに、すべての推測的知識においては原因となる何かが必要ならぬ。というのは、原理は或る意味で結論の作用因だからである。それゆえ、論証も「知識を作りだす三段論法」⁽⁶⁸⁾と言われるのである。ところで、神的知識においては原因となるものは何もありえない。その知識が神自身であることが上述のこと（第45章）から明らかだからである。それゆえ、神の知識は推測的ではありえないのである。

478

その上さらに、自然本性的に認識されるものは、推論なしに我々に知られる。それは第一原理で明らか⁽⁷⁰⁾なことである。ところが、神において自然本性的な認識、同じく本質的な認識以外にはありえないのである。実際、神の知識が自らの本質であることは、先に証明されている（第45章）。したがって、神の認識は推論的ではないのである。

479

さらに、動かされるものすべては、動かされずにただ動かすものである第一動者に還元されなければならない。⁽⁷¹⁾それゆえに、運動が由来する第一の起源というものは、全く動かされずに動かすものでなければならない。ところで、このようなものが神的知性であることは、先に示されている（第44章）。したがって、神的知性は全く動かされずに動かすものでなければならない。ところで、推論は、あるものから別のものへと推移していくある種の運動である。それゆえに、神的知性は推論的ではないのである。

(70) トマスにおいて第一原理は三種類みられる。存在論の第一原理は例えば、形相と質量である。倫理の第一原理は、例えば「悪をしてはいけない」というようなものである。さらに認識論における第一原理がある。例えば、「今、黒いものが部屋を横切って家具の後ろに隠れた」というようなときは、ものの存在、色、数、動きなどに関する認識である。これは直接に感覚知覚から来るもので、誰が見ても議論する余地のないものである。その黒いものは、ゴキブリか、ネズミか、子猫かについて判断すると経験的推測が多少入るが、それ以前の認識。認知科学でいう sense data または sense perception。認識論におけるこうした第一原理はある程度先天的なものである（プラトンとアウグスティヌス参照）が、トマスはアリストテレスの epagoghe（帰納）を取り入れて強調している（C. FABRO, *Introduzione a san Tommaso. La metafisica tomista & il pensiero moderno*, Milano, 1997; B. MONDIN, *Dizionario Enciclopedico del pensiero di San Tommaso*, ESD, Bologna, 1991）。

(71) すべての変化（生成消滅）には原因がある。原因の連鎖をたどっていくとかならず第一原因にたどり着くのである（第13章参照）。

(72) 第二階の天井が第三階の床になる。Marietti 版の脚注によると、この箇所はディオニシオスの『神名論』（VII,3）からの借用で、本書に何回か使用される（*infra* 1453a, 1775, 2271, 2725）。

同じく、我々のうちにある最高のものは、神のうちにあるものよりも劣っている。というのは、下位のものは、その頂点においてしか上位のものに達しないからである。⁽⁷²⁾ところで、我々の認識において最高のものは、推論ではなく、知性であり、知性は推論の起源である。したがって、神の認識は推論的ではなく、ただ知性的なだけである。

さらに、神からすべての不足が除去されるべきであるが、それは先に示されたように（第28章）、神は端的に完全だからである。ところで、推論的認識は知的本性の不完全性から生じる。というのは、他のものを通じて認識されるものはそれ自体によって認識されるものよりも認識程度が低いのである。⁽⁷³⁾また、他者の認識に達するためには、認識する者の本性では不十分で、その他者についての認識が必要だからである。⁽⁷⁴⁾ところで、推論的認識において、あるものは他のものによって認識される。だが、知的に認識されるものは、自らによって認識され、そのことが認識されるのは、外的媒介なしに認識するものの本性で十分である。⁽⁷⁵⁾それゆえに、理性がある意味で不完全な知性であることが明らかである。⁽⁷⁶⁾したがって、神の知識は推論的ではないのである。

その上さらに、諸事物の形象が認識する者のうちにあると、推論の推移をせずに把握される。実

(73) 野球の試合を直接に観戦した人の認識は、その試合について新聞記事で知った人の認識より、優れたものである。

(74) 野球の試合について知りたくて新聞記事に頼るしかない人は、巨人について詳しく知りたいなら、報知新聞、阪神でしたらデイリースポーツの方がよいだろうという認識が必要。哲学書の原文に当たれない場合は、訳書に頼らなければならない。「百聞は一見に如かず」というように、人間は本性上経験的認識を直接に伝えることはできない。

(75) 例えば、阪神は7対1で勝ったから、リーグのトップになったこと。

(76) 「知性と理性は異なる能力ではないが、異なる作用からその名を受ける。知性 (intellectus=intus+legere) というのは、真理[真実]を親密に深く捉えることから名を受け、理性は探求と推測から名を受ける。」(「[E]tsi intellectus et ratio non sunt diversae potentiae, tamen denominatur ex diversis actibus, nomen enim intellectus sumitur ab intima penetratione veritatis; nomen autem rationis ab inquisitione et discursu», II-II, q. 49, a. 5, ad 3)「理解するというのは、可知的真理[真実]を端的に捉えることであり、推論するというのは、可知的真理[真実]を知るために、一つの理解から次の理解へ次第に進むことである。(…)推論と理解の関係は、運動と静止の関係、あるいは探求と所有の関係と同じであり、後者は完全性に前者は不完全性に属するのである(“Intelligere enim est simpliciter veritatem intelligibilem apprehendere. Ratiocinari autem est procedere de uno intellecto ad aliud, ad veritatem intelligibilem cognoscendam. (...) Patet ergo quod ratiocinari comparatur ad intelligere sicut moveri ad quiescere, vel acquirere ad habere, quorum unus est perfecti, aliud autem imperfecti”, I, q. 79, a.8)。ヨハネ・パウロ二世、『信仰と理性』、カトリック中央協議会、2003年 参照。

際、視覚は自らの中に石の類似性があるので、石を認識するために、推論しないのである⁽⁷⁷⁾。ところで、神的本質は先に証明されたように（第54章）、万物の類似性である。したがって、神的本質はあるものを認識するために推論の推移をすることによって進んでいくのではないのである。

483

さらに、神的知识の中に推論を導くことが正しいと思っている人々への解答も明らかである。

a) そのような人々の根拠の一つは、神が神的本質を通して他のものを認識していることからきている。だが、このことは推論的に生じるのではないことがすでに示されている（482）。なぜなら、神的本質と他のものとの関係は原理と結論との関係ではなく、形象と認識された事物との関係だからである（第46章）。

b) また別の根拠は、もし神が三段論法を用いることができないならば、このことはある人たちにとって、おそらく不都合なことに見えるということである。だが、神は三段論法について判断の形で知識を有しているの⁽⁷⁸⁾であって、三段論法を用いながら推論していく形で有しているのではないのである。

484

さて、理性的根拠によって証明されたこの真理について、聖書も証言を与えている。というのは、「ヘブライ人への手紙」(4:13) で「すべてのものが神の目には裸であり、さらけ出されているのです」と語られているからである。だが、推論することによって我々が知っていることは、それ自体で我々にとってあらわで明らかなのではなく、推論によって明白にされ、あらわとされるのである。

(77) 「例えば、☺」 「スマイル」と呼ばれる「エモティコン」から、推測せずに微笑む顔が認識される。☺ 地図記号も諸事物の形象のような働きをしている。

(78) 本章474参照。

A Modern Interpretation of “Summa Contra Gentiles”(8)

Andrea Bonazzi

Tomoko Kitagawa

50 : That God has a Particular Knowledge of all things

51 : Some Discussion of the question how there is in the Divine Understanding a Multitude of Objects

52 : Reasons to show how the Multitude of Intelligible Ideal Forms has no Existence except in the Divine Understanding

53 : How there is in God a Multitude of Objects of Understanding

54 : That the Divine Essence, being One, is the proper Likeness and Type of all things Intelligible

55 : That God understands all things at once and together

56 : That there is not Habitual Knowledge in God

57 : That God's Knowledge is not a Reasoned Knowledge

Since God needs nothing for his completion and since knowledge of other objects would entail change and presuppose imperfection, God primarily and essentially knows only himself. The divine essence is the proper, immediate object of God's understanding; hence God knows all things through one, simple, timeless act of understanding.

A number of difficulties attend the simultaneous affirmation of the simplicity of divine knowledge and of God's comprehensive understanding of a multitude of objects. Thomas denies that the multitude can have distinct being or exist primarily in a separate intellect such as a Demiurge.

To understand God's way of knowing a viable starting point can be found in the nature of human understanding: “By understanding the human intellect, informed by the form of the thing, forms in itself a certain intention or notion of the thing understood, which the definition signifies”. Even though the form of stone is precisely what makes the extra-mental stone stone rather than wood or mud, the mental form of that cognized extra-mental thing is prevented from petrifying our intellect by the radically different mode of its instantiation – conceptual rather than corporeal. A form of the thing is taken on intellectually, and that ensouled form (as distinct from its enmattered counterpart) is a likeness of the thing. The divine essence is the intelligible likeness of all things; through knowing it, God knows all existing things.

Thomas continues the analogy to human understanding arguing that God knows all things together. Even the human intellect can understand many things through one ‘impression’ (species). Our intellect is naturally suited to have intellectual cognition of all sense objects, it is capable of cognizing not only one kind of object (as sight or hearing), but universally. In the act of knowing, the human mind provides a suggestion of the timeless unity of divine knowledge.

“Knowing himself, the divine wisdom knows all things, material things immaterially, divisible

things indivisibly, and many unitedly” (Dionysius).

The analogy from human understanding is nothing more than a necessary but imperfect starting point. Again the method of remotion must play its part. God’s knowledge, unlike human knowledge, is not habitual (as in those who know how to ride a bicycle), or discursive (as in reasoning), and He does not understand by composition or division of different ideas. Thomas underscores the unlike likeness of the human and the divine. Knowledge in us is characterized by the imperfection of our intellectual powers, and yet the link between the two provides the indispensable point of departure for an ascent to the divine intellect.

